

## 『ハワーズ・エンド』における中産階級のコント リーハウス

田中, 雅子  
九州大学大学院 : 博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/1909546>

---

出版情報 : 九大英文学. 59, 2017-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## 『ハワーズ・エンド』における中産階級のカントリーハウス\*

田中 雅子

### 序

E. M. フォースター (E. M. Forster 1879-1971) は『ハワーズ・エンド』(*Howards End*) (1910)で大衆の好評を博し、作家としての地位をゆるぎないものにした。既刊の三作、『天使も踏むを恐れるところ』(*Where Angels Fear To Tread*) (1905)、『長い旅路』(*The Longest Journey*) (1907)、『眺めのいい部屋』(*A room with a View*) (1908)において示されたように、「対立的な世界の衝突」(イギリスの価値観対イタリアの価値観、知的文明対自然など)をめぐる、葛藤、妥協、調和、展開していく個人的人間関係を追うというパターンがこの作品にも見られる。例えば、実務を重んじる外面的の世界と芸術や精神を重んじる内面的の世界、散文と情熱、聖者と獣など、様々な対立する概念が、「Only connect...」というモットーのもとに、何とか結び合わせようと試みられる。前三作にはギリシャ神話やファンタジーの要素が入り、寓話的に解決しようとするため、非現実的な感があるのに対し、本作は、イギリスの階級制度における貧富の問題や、植民地支配に支えられた帝国の富という問題、また農業不況や宅地開発、モータリゼーションによる自然破壊の問題など、当時の社会状況を広く踏まえた上で、問題解決を模索している。その意味で、『ハワーズ・エンド』は、「イングランドの状況」を扱った小説 (the“Condition-of-England novels”) の一つである。そして、トリリングの言葉を借りれば、これは「イングランドの運命についての小説」<sup>1</sup>であり、ハワーズ・エンドの屋敷がイングランドを象徴し、イングランドを受け継ぐのは誰

---

\* 本稿は、日本ハーディ協会第53回大会 (2010年10月30日、於同志社女子大学) における口頭発表に加筆修正を施したものである。

<sup>1</sup> Trilling 102.

か、という問題についてプロットが展開していく。イングリッシュネスの表象としてのカントリーハウスによって、衰えつつあった大英帝国の将来と、土地開発の波で失われる田舎の風景という問題について、作者がどう答えようとしているのか考察していきたい。

## 1. Fertility を体現する屋敷

主な登場人物は、上層中産階級で、知的で教養のあるシュレーゲル家の姉妹マーガレットとヘレン、対して世俗的で实际的なウィルコックス家の主人ヘンリーと妻ルース、さらに下層中産階級で、貧しい生活の中でも知的生活に憧れるレナード・バストと妻ジャッキーである。この三家が、恋愛、結婚、相続などをめぐり、複雑に絡み合っただけで物語は進むが、同時に、ハワーズ・エンドの屋敷が、この物語の主人公であると言ってもいいほどに、大きな存在感をもって描かれている。

ハワーズ・エンドの屋敷は、フォスターが幼少期に住んでいたハートフォードシャー州ステイベネッジにあるルックス・ネストという現存するカントリーハウスがモデルで、4 エーカーほどのこじんまりとしたものであるが、大きな榆の木もあり、長い年月をかけて住み継がれてきたことがわかる。フォスターは借家として 10 年間住んだだけだったが、そこは彼にとって「地上の楽園」となり、彼が深く根を下ろしたと感じたのはこの場所であった。<sup>2</sup>彼は、父亡き後に経済的に援助してくれた大叔母マリアン・ソーントンの伝記の中で、この屋敷への愛着を次のように述べている。「庭、おおいかぶさる榆の木、傾斜する草原、西に広がる素晴らしい眺め、北側にはモミの木に覆われた崖、野バラが絡んだ高い生垣に隣接する農場、これらはすべてハワーズ・エンドで使わせてもらった。家の内装もこの小説に出てくる.... 4 歳の頃からこの家に移り、ネズミの開けた穴で完全に転びそうになったときから、私はこの家を心から深く愛し、...ここで生活して死んで行くことを望んでいた。私たちは 10 年後にそこを出て行ったが、そこで受けた印象は残り、いまでも輝いている。それはいつもはつきりとはではないが、いつも消えることはなく、社会や歴史に対する物の見方を私に与えてくれた。それは中産階級的な物の見方で、ソーントン家に由来する先祖がえりだ。」<sup>3</sup>

<sup>2</sup> King 13-16.

<sup>3</sup> Forster, *Marianne Thornton: A Domestic Biography* 301.

ここからも、ハワーズ・エンドが新興の中産階級に無理なく持てる小さなカントリーハウスであること、またこの屋敷の後継ぎ捜しが、イギリス社会を牽引してきた中産階級の後を誰が継いでいくかという問題であることがわかる。

ハワーズ・エンドの屋敷の特徴は、まず、豊かな自然に囲まれ、生命感にあふれていることが挙げられる。物語は、ウィルコックス家のハワーズ・エンドの屋敷に招待された、ヘレンの手紙から始まっている。葡萄の葉で覆われたこじんまりとした古い屋敷がいかに素晴らしいか、そこに覆いかぶさるように立つ榆の大木がとても気に入ったこと、木々の生い茂る庭でウィルコックス一家が熱心にスポーツに興じること、ウィルコックス夫人（ルース）が牧場から干し草を抱えてくる姿、そしてそれらにヘレンが魅了されていることが描かれる。

ルースの死後、ヘンリーと婚約したマーガレットも屋敷を訪れ、その美しい生命感を感じ取るのが、次の引用である。

Down by the dell-hole more vivid colours were awakening, and Lent lilies stood sentinel on its margin, or advanced in battalions over the grass. Tulips were a tray of jewels. She [Margaret] could not see the wych-elm tree, but a branch of the celebrated vine, studded with velvet knobs, had covered the porch. She was struck by the fertility of the soil; she had seldom been in a garden where the flowers looked so well, and even the weeds she was idly plucking out of the porch were intensely green. Why had poor Mr Bryce fled from all this beauty? For she had already decided that the place was beautiful.

‘Naughty cow! Go away!’ cried Margaret to the cow, but without indignation.(200)

牧場からは牝牛も入りこみ、この土地の fertility を強めているようである。さらに、屋敷の近くには、デー人へ侵攻された時代の古墳が6基あり、兵士達の眠る墓が「春の乳房のように膨らんでいる」(301) とか、マーガレットの足元で「生きているかのように動いた」(324) と描写されている。まるで、この母親的生命感、fertility にあふれる大地に抱かれ、11世紀の死者たちがこの土地の一部となり、自然に回帰しているかのようなようである。死者の眠る

墓地でありながら、生命感に溢れるというモチーフは、ルースの埋葬時にも現れている。その場面では、埋葬があると知らずに、木こりが墓地の榆の木の上で仕事をしているのだが、彼は恋人のことを思い、マーガレットが供えた派手な花束を失敬して、逢瀬に向かい、一夜を楽しむ(98)。

屋敷と、周りの肥沃な自然とが織りなす調和のとれた美しい世界、これは、イギリスのカントリーハウスの理想的な姿として、ヴィクトリア・サックヴィル＝ウェストが *English Country Houses*(1941)で述べていたものと一致する。<sup>4</sup>すなわち、イングリッシュ・カントリーハウスとは、カントリー（田園）にあるというだけでなく、本質的にその一部になっていて、そこで自然に生まれ育ったものであるということだ。壮大な構えとか、質素な構えとかにかかわらず、家は周りの風景と調和し、これまで、そこに住んでいた先祖の人々と、また現在そこに住んでいる人々の生活を感じさせるというものである。<sup>5</sup> 貴族であったサックヴィル＝ウェスト家の大邸宅ノウルや、彼女が廃墟の城を購入し造り上げたシングハースト・カッスルの大庭園に比べると、ハワーズ・エンドの屋敷はごく質素で小さな農家にすぎないが、庭の花や古い大木、果樹園や牧場など、豊かな自然に彩れ、生命感を感じさせる点は、イングリッシュ・カントリーハウスと呼ばれるに値する。

## 2. 不動産としての屋敷と、そこに宿る魂

ハワーズ・エンドで生まれ育ったルースにとって、この屋敷は単なる家ではなく、「聖なるものの中で最も聖なるもの」(95)である。保守的で男性中心的なウィルコックス家の中で、彼女はやさしい妻であり母親なのだが、彼女の生涯唯一の情熱はこの屋敷にある(95)。このことを、マーガレットが直感的に理解し、屋敷への唐突な招待に応じたがゆえに、ルースはこの屋敷の精神的後継者としてマーガレットを選び、遺言書を残したと考えられる。

一方、「目に見えない精神的なもの」に無関心なウィルコックス家の人々にとっては、ハワーズ・エンドの屋敷は8軒もある不動産の一つにすぎない。彼らは、これが彼女（ルース）にとって一つの魂であり、彼女がその魂の相続人を探し求めていたとはわかるはずもない(107)。そのため、都合に合わせてタウンハウスや田舎の屋敷を転々とし、一つの土地に定着せず、根なし草

---

<sup>4</sup> Sackville-West 7-9.

<sup>5</sup> Girouard 306.

のような生活をしている。そのことが描かれているのが次の引用である。

But the Wilcoxes have no part in the place, nor in any place. It is not their names that recur in the parish register. It is not their ghosts that sigh among the alders at evening. They have swept into the valley and swept out of it, leaving a little dust and a little money. (246)

これは、ヘンリーがウェールズ近くの新ロップシャー州に持っていた、オニトン・グレンジという屋敷を去った時の描写である。廃墟となった城や川もある広大なカントリーハウスだが、遠くて不便で湿気が多いという理由で、また、ここでヘンリーの昔の浮気がマーガレットにばれたということもあってか、娘の結婚式に使っただけで人に貸してしまう。しかし、マーガレットは、ウェールズの山並みや、西日に輝く川の見えるオニトンの美しい風景を気に入り、そこにルースのように「新しい聖域を造ろうと決心」(220)する。彼女は、「未来の家を自分が彩り、また家に自分が彩られる」(241)という、家との一体感を感じ、ようやく根付くことができると思っていたからこそ、ヘンリーの判断に落胆する。新興中産階級の彼らが、金力でカントリーハウスを所有しながら、共同体にも自然にも根付かず、まるで自動車さながらのスピードで消えていく様子が描かれている。屋敷とその周囲の自然に愛着とつながりを持たず、農村コミュニティの荒廃を助長する持ち主では、カントリーハウスはその本来の素晴らしい姿で将来生き残ることはできない。だからこそルースは、マーガレットに屋敷を託すのだ。

元々、ハワーズ・エンドの屋敷は、裕福な独立自営農民（ヨーマン）であったルースの実家のもので、30 エーカーはあったと言われている。しかし、小規模農園経営が立ち行かなくなり、つぶされそうになった時、ルースと結婚したヘンリーの財力によって救われていた。この設定は、1880年代にアメリカからの安い穀物が大量輸入されて起こった、イギリスの農業不況を踏まえている。マーク・ジルアードの指摘によれば、土地収入に頼っていた上流家庭が困窮し、多くの農園が手放される一方、カントリーハウスにステータスシンボルとしての憧れをもっていた実業家や産業家など裕福な新興の中産階級は、これを購入したり、その資金的援助を期待され婚姻関係が結ばれたりすることもあった。<sup>6</sup>「ルースはもともとある軍人と結婚するはずだった」

---

<sup>6</sup> Girouard 300.

という話がエイブリーによって明かされるが、そうせずにヘンリーと結婚したのには、こうした経済的事情があったからだと考えられる。

採算の取れない農場の多くは売られ、つぶされ、二軒続きの小さな家の建つ郊外型住宅地へと変貌していく中、ヘンリーは牧場を縮小し、生垣で牧場を切り離し、パドックをつぶして自動車の車庫を造り、側に立つ榆の木の根にダメージを与える。ヘンリーによるこの現代的改良を、マルコム・ケルゾールは、屋敷と、生産性のある自然とのつながりを断つ行為であると説明している。<sup>7</sup>屋敷の救い主のように見えたヘンリーが、実はその破壊者であることがわかり、ルースはハワーズ・エンドの屋敷をマーガレットに託すのだ。ルースの死後、屋敷は借家人に貸し出され、無断でまた貸しされそうになり、空き家として放置される。「こんな恥ずべき散らかり様は見たことが無い」とヘンリーの息子のチャールズはけなすが、マーガレットは、「チャールズは死に、みんなも死に、生きているのは屋敷と庭だけだ」と感じる。

She must have interviewed Charles in another world – where one did have interviews. How Helen would revel in such a notion! Charles dead, all people dead, nothing alive but houses and gardens. The obvious dead, the intangible alive, and no connection at all between them! (200)

チャールズと会ったことが、まるであの世のような、遠い別世界のこのようで、目の前の屋敷と庭の方が生き生きとした現実に見える、とマーガレットが物思いにふけていたちょうどその時、鍵がかかっていたはずのドアが開き、彼女が入ると中から風が吹き、ひとりでにドアがしまる。まるで、屋敷にルースの魂が宿り、意志を持ち、彼女を招き入れたかのようだ(201)。さらに、無人のはずの家の中で、心臓の鼓動のような音が響き渡り、マーガレットを驚かせる(202)。これは隣に住む管理人のエイブリーの足音だったのだが、この老女はマーガレットをルースと見間違える。エイブリーはかつてこの屋敷の後継ぎであったトムという男性（ルースの兄弟か伯父）に求婚されたことがあるのだが、それを断わったため、彼は外地へ行き亡くなり、ハワーズ家は終わったという過去がある。もし結婚していれば、エイブリーがこの屋敷の女主人だったのだ。そんなエイブリーから、ルースと見間違われるということは、マーガレットがルースの後継者として認められたと解釈で

---

<sup>7</sup> Kelsall 174-75.

きる。

### 3. 流れに浮かぶお金の島

次に、この屋敷がブリテン島の象徴にもなっていく過程を見てみよう。マーガレットはウィッカム・プレイスというロンドンの家で生まれ育ったが、都市再開発のせいで賃貸契約が更新されず、新しい家探しで悩んでいた。都市開発による街並みの変化は、「煉瓦とモルタルが、噴水のせわしない水のようにせりあがっては消えてゆく」(59)とあるように、水のイメージで描写され、家々を飲み込んでいく。次の引用には、開発の波がロンドン郊外にまで浸食する様子が描かれている。

...the Schlegel household continued to lead its life of cultured but not ignoble ease, still swimming gracefully on the grey tides of London. Concerts and plays swept past them, money had been spent and renewed, reputations won and lost, and the city herself, emblematic of their lives, rose and fell in a continual flux, while her shallows washed more widely against the hills of Surrey and over the fields of Hertfordshire. This famous building had arisen, that was doomed. (115)

文化的で安楽な生活を続けるシュレーゲル家は、「ロンドンの灰色の潮に乗って優雅に泳いでいた」と表現され、ロンドンでの生活は、お金と評判が入りする絶え間ない水の流れて象徴されている。またロンドンの街並みそのものも、ビルが建てられては崩されて行く浅瀬のように、サリー州やハーフオードシャー州の野原に打ち寄せてきていて、こうした水の流れに流されることを、マーガレットは次のように恐れている。

‘I hate this continual flux of London. It is an epitome of us at our worst – eternal formlessness; all the qualities, good, bad and indifferent, streaming away – streaming, streaming for ever. That’s why I dread it so. I mistrust rivers, even in scenery. Now, the sea-’(184)

この「水の流れの中の家」という構図は、次の引用に見られる「お金の島に立ってられる金持ち」という構図と呼応している。

You[Margaret’s aunt] and I[Margaret] and the Wilcoxes stand upon money as upon islands....we ought to remember....we are standing on



these islands, and that most of the others are down below the surface of the sea....I'm tired of these rich people who pretend to be poor, and think it shows a nice mind to ignore the piles of money that keep their feet above the waves. I stand each year upon six hundred pounds,...and as fast as our pounds crumble away into the sea they are renewed – from the sea, yes, from the sea. (72)

ここでマーガレットは、自分たちの文化的な生活を支えているのは、裕福であった母親の遺産によるものだということを自覚し、明言している。「海中に沈んでいる貧しい人たち」というくだりは、マーガレットやヘンリーの無責任な情報のせいで保険事務員からあつという間に無職、そして物乞いというどん底にまで転落するレナードを想起させ、大勢の貧しい人たちに対し、少数の富裕層だけが富を独占しているという問題が読み取れる。そして、引用の最後の部分の、「また新しくお金が海からわいてくる」というくだりは、その富が海外の植民地貿易からの利益の上に成り立っているということを示唆しているように読み取れる。マーガレット達が働かなくとも遺産を食いつぶさずに豊かな生活ができたのは、銀行利子・配当収入が高額であったからだ。20世紀初頭に、これを可能にしていたのは、海外植民地、特にインドを対象とする投資の急増と、インドからの巨額な貿易黒字であった。芸術と教養を重んじるシュレーゲル家の豊かな生活は、植民地から搾取されたものの上に成り立っていたということが示唆されている。ウィルコックス家の財力も、帝国西アフリカ・ゴム会社経営という植民地での富の搾取によるものであった。マーガレットはヘンリーの息子のチャールズたちが植民地に電話している時の口調の横柄さに気付くほどに、帝国主義者の振る舞いには違和感を覚える。しかし、彼女自身も、預貯金や投資により、その帝国の経済力に一役買い、また恵みを受けていたのである。このような植民地における不当な搾取の上の財力に支えられたカントリーハウスとは、モラル上非常に危ういものであったと言える。実際に、後に植民地側からの民族運動や、独立運動を招き、この経済システムは瓦解する。しかも、ゴム会社とは、田舎に排ガスと油をまき散らす自然の破壊者としてたびたび描かれた自動車を支える産業である。このことから、ウィルコックス家はカントリーハウスの後継者としては長続きしそうにないと考えられる。

#### 4. ブリテン島と屋敷の後継者

次にこの「海に浮かぶお金の島」がブリテン島と結び付く過程を見てみる。マーガレットはドイツから来た従妹に、イギリス的なものを見せるために、イングランド南西部の海岸の、パーベック・ヒルズに行く。ここから、プール湾、ドーチェスターの荒野、スタウア川、エイヴオン川、ソールズベリー平野、ワイト島、サウサンプトン港、ポーツマス港などを俯瞰すると、ブリテン島の調和のとれた姿が眼下に広がる。彼女の想像力は鳥の視点のように広がり、ロンドンから忍び寄る都市化の波や、大陸に対峙する海のうねりを感じ、電車や道路とはりめぐらされた交通網から、イギリス全域のことに及ぶ(171)。この想像力の膨らみそのものも、海の波の比喩で表現されている。そして、次の引用のように、彼女の視点は「世界の海の中で生きているブリテン島」に焦点を結ぶ。

England was alive, throbbing through all her estuaries, crying for joy through the mouths of all her gulls, and the north wind, with contrary motion, blew stronger against her rising seas. What did it mean? For what end are her fair complexities, her changes of soil, her sinuous coast? Does she belong to those who have moulded her and made her feared by other lands, or to those who have added nothing to her power, but have somehow seen her, seen the whole island at once, lying as a jewel in a silver sea, sailing as a ship of souls, with all the brave world's fleet accompanying her towards eternity? (178)

これは、イギリスのあらゆる河川から内陸に向かって、満ち潮が上がってくる光景だが、イギリスはまるで人体のように脈打ち、外からの侵入に対し自らを守ろうとする、「美しい宝石のような島国」<sup>8</sup>、ブリテン島のイメージで描かれている。そして、「世界に広がる海と対峙する、ブリテン島が脈を打つ」という描写から思い出されるのは、ハワーズ・エンドの屋敷が鼓動のような音を立てていたことだ。これにより、ハワーズ・エンドの屋敷がブリテン島ともオーバーラップされることになり、屋敷の後継者が、イギリスの後継者になるという構図が浮かび上がってくる。

目の前に実際に広がる南イングランドの海岸風景から、河川を上り、ブリ

---

<sup>8</sup> 'This precious stone set in the silver sea,' (Shakespeare, *King Richard II*, II.1.728).

テン島全体を俯瞰する視点に発展したように、マーガレットは、ハワーズ・エンドの屋敷と榆の木を見ては、イギリス全体のことを考える。彼女は屋敷でエイブリーと会った日の夜、次の引用に見られるように、ハワーズ・エンドからイギリスを理解しようとする。

Her evening was pleasant. The sense of flux which had haunted her all the year disappeared for a time. She forgot the luggage and the motor-cars, and the hurrying men who know so much and connect so little. She recaptured the sense of space, which is the basis of all earthly beauty, and, starting from Howards End, she attempted to realize England. She failed – visions do not come when we try, though they may come through trying. But an unexpected love of the island awoke in her, connecting on this side with the joys of the flesh, on that with the inconceivable.(204)

彼女はハワーズ・エンドによって、「絶え間なく流される」という不安感から解放される。この不安は、「新しい家を見つけなければならない」という当面の不安だけではなく、彼女の父親がドイツ人であり、彼女はイギリスで生まれたとはいえ、チャールズたちから見れば生粋のイギリス人ではなく、「コスモポリタン」的な根なし草であることも原因と考えられる。彼女は、国際的でリベラルな教養人として、国籍・階級・性別による偏見からは自由を保っているが、言いかえると根を張る場所、帰属できる場所が無いのだ。そんな彼女にとって、長い年月をかけて、その土地の自然に根付いている屋敷は、榆の木との結び付きも感じさせてくれ、まさに理想的な帰属場所である。そして、根付きたいと思えたことで、この土地が存在するイギリス、ブリテン島に対する愛着も感じるようになる。

...it [Howards End] was English, and the wych-elm that she saw from the window was an English tree. No report had prepared her for its peculiar glory. It was neither warrior, nor lover, nor god; in none of these roles do the English excel. It was a comrade, bending over the house, strength and adventure in its roots, but in its utmost fingers tenderness....It was a comrade. House and tree transcended any simile of sex....As she stood in the one, gazing at the other, truer relationships had gleamed. (206)

この屋敷と榆の木を、イギリス的なものの理想、イングリッシュネスの表象として見た場合、土着の自然や歴史に根付いていること、また、仲間として寄り添ってはいるものの、別種の物としての、対等に存在しているということが挙げられる。イングランドのカントリーハウスを、向かうべき一つの理想として提示したのではなく、人それぞれに帰りたくなる場所があり、その愛すべき姿も様々であるのだから、互いの帰属場所を破壊し合わないよう、互いにつながりを見つけて維持できれば...というリベラルな個人主義に基づき願いがこめられているとも考えられるのではないだろうか。

ただ、「男女の性別を超えた仲間関係」というくだりは、マーガレットとヘンリーの夫婦生活に *fertility* が描かれていないことへのエクスキューズにも取れる。ルースは屋敷の聖なる、そして豊穡をもたらす女主人という、カントリーハウスの伝統的表象と一致していた。しかし、マーガレットは、結婚年齢が高かったせいか、ヘンリーとの夫婦生活は言及されず、むしろ「赤ん坊嫌い」で、断固としてキスを拒む場面が描かれている(199)。早くに母親を亡くし、シュレーゲル家の小さな女主人として、妹や弟の面倒を見てきたために、精神的母親という役割はこなせるのだが、母親になるために肉体性を発揮することも無く、次の後継者を生み出す生産性が欠けている。それを補うのが、ヘレンとレナードの子供だと考えられる。妊娠したヘレンがハワーズ・エンドの屋敷に現れた時の様子は、ボッティチェリの絵『ラ・ブリマヴェーラ』に出てくる、妊娠したニンフ、クロリスさながらで、実のつかない葡萄の蔓も、額縁のように美しくヘレンを飾り、ヘレンと屋敷の自然とが一体になって *fertility* を体現しているようだ。それとは対照的に、レナードは、衝動的に一夜を共にした罪悪感にさいなまれ、精神分裂の症状を起こし、マーガレットに懺悔の告白に来たところをチャールズによって殺されてしまう。レナードは、貧しくとも教養をつければ、「いつか灰色の水から頭を出し、宇宙を見ることができるよう」(62)と希望を抱き、ラスキンの『ヴェニス石』を読み、想像力でヴェニスの水路を思い浮かべ、ロマンスの世界に現実逃避する。小説に出てくる「大地に戻る」というアイデアに刺激され、夜通し森を歩きまわる行動力も持っている。しかし、その努力もむなしく、芸術について自分の言葉で語ることもできず、いつも空腹で、貧弱な体つきをしている。シュレーゲル姉妹は、善意から彼を経済的に支援しようとして、結

果的に彼を失業、精神分裂、そして心臓麻痺へと追いやることになるのだが、彼の子供は屋敷の将来の後継者となることが約束される。その理由は、レナードの祖先が農業労働者であったことが大きいと思われる。

Here [Hilton] men had been up since dawn. Their hours were ruled, not by a London office, but by the movements of the crops and the sun. That they were men of the finest type only the sentimentalist can declare. But they kept to the life of daylight. They are England's hope. Clumsily they carry forward the torch of the sun, until such time as the nation sees fit to take it up. Half clodhopper, half board-school prig, they can still throw back to a noble stock, and breed yeoman.

At the chalk-pit a motor passed him [Leonard]. In it was another type whom Nature favours – the Imperial. Healthy, ever in motion, it hopes to inherit the earth. It breeds as quickly as the yeoman, and as soundly; strong is the temptation to acclaim it as a super-yeoman, who carries his country's virtue overseas. But the Imperialist is not what he thinks or seems. He is a destroyer. He prepares the way for cosmopolitanism, and though his ambitions may be fulfilled the earth that he inherits will be gray. (314-15)

ここでは独立自営農民ヨーマンが、イギリスの次の担い手として挙げられている。搾取されるだけの小作人ではなく、自己の所有地で、農業に従事できれば、健康的な肉体と、精神や想像力の自由を確保したまま、土地の自然に根付いた生活ができるのではないか、土地に根差すことが、結果その土地を愛し、今ある美しい田園風景を少しでも永らえさせることになるのではないか、という希望的観測が見られる。

## 結

かつてヨーマンの所有していた農場を、農業労働者出身の、レナードの子供に譲渡するという結末は、ヘンリーのように、土地に根付かず、賃金労働契約で小作人まかせにしては、もはや長続きしないということである。農業そのものへの理解、愛着をもった人間が、誇りをもって従事していなければ、都市化の波、多額の相続税といった障害で、いとも簡単に分割、売却され消滅してしまうからである。20世紀、上流階級や中流階級は次第にそれ

までの支配力、経済力に衰えを見せ、大規模なカントリーハウスの多くは、高額な維持費と相続税に苦しみ、ナショナル・トラストに寄贈され、イギリス全体の遺産となり、その風景は21世紀の今も、一見、保護されているように見える。しかし、個人が所有しないということは、住人がいないということでもある。カントリーハウスは、そこに昔から伝わる、歴史や迷信などの伝統を保ち続けた上で、現在そこに住み、生活する人間の気配が息づいてこそ、有機生命体のような生命感を表出できるのだと思われる。その意味では、小規模なカントリーハウスの方が、個人宅として所有され続ける可能性が高く、実際、ルックス・ネストの屋敷は、個人宅として現存している。ハワーズ・エンドには、そのような小規模の自営農場として続くことへの淡い期待と、その次の代は相続税で存続の危機になるのだろうかという不安とが、どちらも感じられる。ルースやマーガレットのように「目に見えないもの」や「土地の霊」を感じ取れる感受性、レナードの持つロマンチックな行動力と想像力、またレナードの祖先に由来する労働のできる健康的な肉体、そしてマーガレットが説いていた確実なお金の島、これらがすべて結びついた後継者であれば、その一代は生き延びることができるかもしれない、というのが作者の出した苦渋の答えではないかと考えられる。

## 参考文献

- Ashby, Margaret. *Forster Country*. 1991. Summersdale Publishers, 1995.
- Forster, E. M. *Howards End*. 1910. Penguin, 1989.
- . *Marianne Thornton 1797-1887: A Domestic Biography*. Edward Arnold, 1956.
- Gill, Richard. *Happy Rural Seat: The English Country House and the Literary Imagination*. Yale UP, 1972.
- Girouard, Mark. *Life in the English Country House*. 1978. Penguin, 1980.
- Kelsall, Malcolm. *The Great Good Place: The Country House & English Literature*. Columbia UP, 1993.
- King, Francis. *E. M. Forster*. 1978. Thames and Hudson Ltd, 1988.
- Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. Yale UP, 1997.
- Trilling, Lionel. *E. M. Forster*. The Hogarth P, 1951.